2025年7月13日（聖霊降臨後第5主日・特定10、C年）

牧師メッセージ

「誰が隣人に「なった」か」

（ルカによる福音書19:25-37）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音は、律法の専門家がイエスを試そうとして質問することから始まります。そこから始まる問答を通して、イエスはとても大切なことを私たちに伝えました。この律法の専門家は、「神を愛し、隣人を愛する」という律法の核心をもって答え、イエスからも「正しい」と言われました。しかし、「それを実行しなさい」と言われたことで、律法学者は、「隣人とは誰ですか？」とイエスに続けて問うことになりました。ここで示されていることは、律法の核心を知ってはいても、それを知っているだけではまったく意味が無い、ということです。

「隣人とは誰か」と問うた彼の発想は、「愛する」ということを実行する前に、まずは隣人を特定し、その特定された人だけを愛そう、というものです。それは果たして正しい姿勢でしょうか。それが彼に問われた事です。ユダヤ人である彼の愛する対象＝「隣人」には、サマリア人は入っていませんでした。なぜなら、ユダヤ人とサマリア人は対立してきた歴史があるからです。そして、彼にとって隣人とは、レビ人や祭司といった、正統とされるユダヤ人でした。しかし、イエスが話された、「目の前に瀕死の人がいるのに、祭司とレビ人は通り過ぎ、サマリア人がその人を助けた」という話しは、まったく異なる隣人を彼に示しました。イエスは彼に問いかけます。「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」彼は「サマリア人」をよほど嫌悪していたのででしょう。「サマリア人」という言葉を口にするのを拒むように、「その人に憐れみをかけた人です」と答えました。

「誰が隣人であるか」と問うた律法学者に対し、「誰が隣人になったか」と問うたイエス。ここに大きな違いがあります。祭司やレビ人は、瀕死の人が目の前にいても、その人を思うよりも、その危険な場所から身を避けることを考えました。しかしサマリア人は瀕死の人を憐れみ、近寄って介抱し、この人に尽くしました。憐れみとは、相手の痛みや悲しみへの痛みを伴うほどの共感であり、思いやりです。それは、虐げられた人や病にある人を見つめるイエスの思いであり、放蕩息子が帰ってきた時に駆け寄って迎えた父親の思いと同じものです。そしてそれは、神のわたしたち一人ひとりへの思いです。神がそれほど大切にしてくださっている「命」そのものを心から大切にするとき、目の前の人「隣人になる」のです。それは決して人種や立場、そういう違いによって限定されるものではありません。イエスは言います。

「行って、あなたも同じようにしなさい。」

わたしたちが誰かの隣人になることを妨げるものは何でしょうか。ただひたすら、単純に、目の前の命を見つめ、駆け寄る人間でありたいと願います。